第９章　実践研究
筑波大学附属聴覚特別支援学校幼稚部実践研究

Ⅰ はじめに

１.現状と課題

2006年の日本耳鼻咽喉科学会による人工内耳適応基準の改定により、全国的に埋め込み手術の低年齢化が進んだ。2014年の改訂以降は、新生児聴覚スクリーニングの普及と相まって、人工内耳装用開始時期の更なる早期化が進むとともに両耳装用児の数が増加している。このような医療技術の進展を背景に、本校幼稚部においても人工内耳を装用幼児が増えている。そこで、人工内耳装用幼児に対する効果的な言語指導について、実践を通して明らかにする必要があると考える。

２.本校における言語指導について

本校幼稚部では、これまでコミュニケーションを通した言語指導の実践と研究を重ねてきた。その成果から、身近な人との良好な人間関係を基盤にお互いの気持ちを通い合わせ、わかり合う経験を重ねること、その上で話し手をよく見て、理解しようとして聞き、自分の思いや考えを自分なりの方法で表現し、伝え合う喜びを味わうことが言葉の獲得につながると考えている。

日々の指導の拠り所となるものとして教育課程を作成しているが、言語と関係が強い領域「言葉」、「聴覚活用」、「発音」におけるねらいは、次のように設けている。

「言葉」
(1) 進んで人の話を聞き、きちんと理解しようとする態度を身に付ける。
(2) 日常生活に必要な言葉を身に付ける。
(3) 言葉のきまりや面白さに気づき、言葉の感覚を豊かにする。
(4) 自分の経験したことや思ったこと、考えたことなどを話す。
(5) 身近な人の話すことをよく聞いて、自分の気持ちや考えなどを言葉で表現し、伝え合う喜びを味わう。
(6) 絵本や物語などに親しみ、知識や想像力などを豊かにする。

「聴覚活用」
(1) 補聴器等を活用し、音や言葉を注意深く聴こうとする意欲や態度を身に付ける。
(2) 話された言葉を聞くことに慣れ、進んで理解しようとする。
(3) 音や音楽に親しみ、進んでそれらを生活に取り入れたり楽しんだりする。
(4) 補聴器等の使い方に慣れ、日常の管理が一通りできる。
(5) 補聴器等を通して自分の声を聞き、声の出し方をいろいろ調整できる。

「発音」
(1) 明るい声が身につき、場に応じた声を使おうとする。
(2) 言葉のリズムやイントネーションなどに気を付けて話そうとする。
(3) 発音に気を付けて、相手にはっきり伝わるように話そうとする。
(4) 発音の基礎となる遊びや発音の練習に、意欲を持って楽しんで取り組む。
(5) 音韻サインや文字を積極的に利用しようとする。

幼稚部教育課程(2011　筑波大学附属聴覚特別支援学校幼稚部)より抜粋

３.本校幼稚部教員へのアンケート調査の結果から

実践研究に先立ち、幼稚部教員に「人工内耳を装用している子どもへの指導で特に気を付けていること」について自由記述によるアンケートを実施した。記述内容を整理すると、概ね「傾聴態度」、「理解の程度の確認」、「相手に伝わるように話すこと」、「聞き洩らしや聞き間違いへの意識付け」、「音韻の理解」、「個人差への対応」、「安全面の配慮や故障への対応」に分けられた。中でも「傾聴態度」と「理解の程度の確認」に関する記述が多かった。

「傾聴態度」に関しては、「視線を合わせたコミュニケーションに心がけている」、「耳だけで聞きがちなので相手を見て話を聞くように促している」、「話者を見ていなくても他児と教師のやりとりを聞いて、同じように答えたりそれらしく答えたりするが、実際は理解していないことがあるため、傾聴態度を育てることに力を入れている」など、相手を見ること、分かろうとして聴くこと等、話を聞くときの気持ちの向け方や態度に関する記述が多かった。

また、「理解の程度の確認」に関しては、「言われていることや話の内容が理解されているかを確かめる」、「音への反応は良くても聞こえていることと理解していることを見誤らないように留意している」など、子どもがどのように理解をしているかやりとりの中で確かめているとの記述が多かった。

以上のことから、人工内耳装用幼児の言語獲得に関する現状と課題を踏まえ、本校が継承してきたコミュニケーションを通した言語指導を通して、教師が子どもとのかかわりの中で行っている様々な指導上の工夫について明らかしたい。

Ⅱ 目的

本校幼稚部に在籍する人工内耳装用幼児に対する「聴覚を活用した言語指導」を通して、有効な指導に関する実践的な知見を得ることを目的とする。

Ⅲ 方法

１.実践研究の流れ

1）実態把握のための評価内容・方法の検討、実施

子どもの全体的な発達を捉えた上で、聞こえ、言語理解・表出、発音などについて、評価内容と方法を検討し実施する。

2）実践研究

①授業研究

「聴覚を活用した言語指導」においてそれぞれの教員が大事にすべきと考えていることについて分析し、「授業を振り返る視点」として整理する。その視点に基づいて授業研究を行う。

②事例検討

人工内耳装用幼児のそれぞれのニーズに合わせた指導の在り方を検討するために、人工内耳装用幼児を対象に事例検討会を行う。事例検討会では、具体的な指導法やつまずきの背景について分析し、その結果を実際の指導に反映する。

２. 対象幼児

2019 年度、本校幼稚部に在籍している人工内耳装用幼児 11 名（３歳児５名、４歳児５名、５歳児１名）である。表 9-1 に補聴機器の装用状況を示した。

表 9-1 補聴機器の装用状況

	補聴機器の装用状態	
	右	左
A児	人工内耳	人工内耳
B児	人工内耳	補聴器
C児	人工内耳	補聴器
D児	人工内耳	人工内耳
E児	人工内耳	人工内耳
F児	人工内耳	人工内耳
G児	人工内耳	補聴器
H児	人工内耳	人工内耳
I児	補聴器	人工内耳
J児	人工内耳	人工内耳
K児	人工内耳	人工内耳

３. 倫理的配慮

本研究の実施に先立ち、筑波大学附属学校教育局研究倫理委員会に研究実施の承認を得た。その後、保護者に説明して同意を得た。

４. 研究計画

実践研究の計画を表 9-2 に示す。

表 9-2　研究計画

時期		実施内容	
第一年次	4月 5月	・「聴覚を活用した言語指導」に関する共通理解 ・「人工内耳装用幼児への指導に関するアンケート(事前)」実施 ・「授業を振り返る視点」の整理	・評価内容・方法の検討 全体的発達 きこえ，受容態度 言語発達(表出，理解) 発音明瞭度 ・言語発達(理解，表出)に関する評価の作成
	6月	授業実践 ・授業研究会(グループ)① ・事例検討会① ・評価内容・方法の検討	
	7月	・授業研究会(グループ)② ・全体研究会	
	8月		
	9月	・授業研究会(グループ)③	
	10月	・授業研究会(グループ)④ ・事例検討会②，③	・実態把握の実施
	11月	・授業研究会(グループ)⑤	
	12月	・全体研究会	
	1月	・授業研究会(グループ)⑥ ・事例検討会④ ・全体研究会	・結果の集約
	2月	・幼児の変容の確認 ・事例検討会⑤	
	3月	・事例報告会 ・全体研究会	・一年次の評価
第二年次	4月		・引継ぎ
	5月	授業実践 ・授業研究会(グループ)⑦ ・発話記録の作成	
	6月	・授業研究会(グループ)⑧ ・発話記録の作成 ・事例検討会⑥，⑦	
	7月	・授業研究会(グループ)⑨ ・発話記録の作成 ・事例検討会⑧ ・全体研究会	
	8月		
	9月	・授業研究会(グループ)⑩ ・発話記録の作成 ・事例検討会⑨，⑩	
	10月	・全体研究 ・研究会等での発表	・実態把握の実施
	11月	・「人工内耳装用幼児の指導に関するアンケート(事後)」実施 ・実践研究のまとめ	
	12月	・報告書作成	
	1月		
	2月	成果報告会	
	3月	・報告書提出	

Ⅳ 実際（一年次）

１.「聴覚を活用した言語指導」に関する共通理解

付箋紙を活用して、「聴覚を活用した言語指導」をテーマにそれぞれの教師が大切に考えて指導していること、指導上の工夫や配慮事項、子どもに付けさせたい力や必要な力等について意見交換を行い、共通理解事項として整理した。

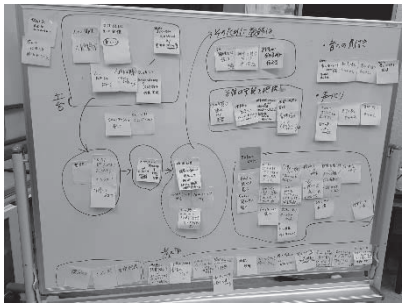


図 9-1 「聴覚を活用した言語指導」の共通理解事項

２.実態把握のための評価内容・方法の検討、実施

1）評価方法の検討

幼児の評価は、集中力が短いことや自覚的評価が難しいことから、聴覚障害のある幼児の言語発達に密に関係する評価内容を検討し、表 9-3 の通り評価方法を決定した。

表 9-3 評価内容・方法一覧

評価内容	目　　的	評価方法
全般的な発達	「運動・探索・社会・生活習慣・言語」の各領域における発達段階を把握し、子どもの育ちを総合的に理解する。	津守式乳幼児精神発達診断法
きこえ	裸耳聴力、人工内耳及び補聴器の装用閾値を把握する。	聴力測定（標準、装用閾値）
受容態度	話を聞いたり内容を理解したりする時の子どもの受容態度を把握する。	受容態度評価表を基に試作（「幼稚部３年間の姿」2004 年筑波大学附属聾学校幼稚部 pp.33-35）表 9-4
言語発達	言語表出と言語理解について子どもの実態を把握する。	数の記憶、ことばの復唱、ことばの理解、聞いて理解、読んで理解、お話づくり表 9-5
発音	単音での発音の実態を把握する。	対象音：直音（清音、濁音、半濁音） 67 音節＋「ン」

2）実態把握の実施について

①実施期間　2019 年 10 月～11 月

②検査者　担任

発音については、担任が検査を実施し、評価は、担任以外の２名の教師が行う。

③その他　・言語発達や発音の検査においては、幼児の発話を IC レコーダーに録音し必要に応じて確認する。

・検査の実施にあたっては、授業内で調整し、幼児に過度な緊張を強いる場面を作らないように配慮する。

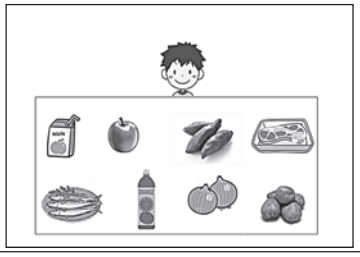
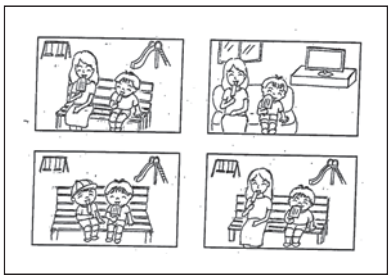
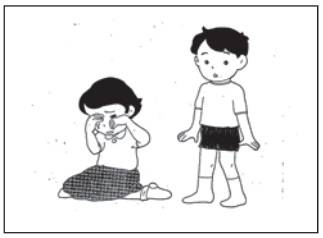
・事前に保護者に検査の趣旨等を説明する。

表 9-4　受容態度評価表（試作）の項目

1	話に合わせて絵や写真や身振りなどが手がかりに使われることで，言葉だけでは通じない内容を受け取ることに慣れる。例）休んだ友達のことを写真や絵を手がかりに使って説明してもらうと大まかに理解する。
2	自分の気持ちを汲み取って関わってもらうことに慣れ，担任や母親からの話しかけを期待する。
3	担任や母親から，生活の流れに沿った簡単な言葉で話しかけられると，言い終わるまで相手を注視する。
4	担任や母親に働きかけられても，相手や話しかけの内容に気持ちが向いていない時は，視線をそらすことがある。
5	担任や母親から簡単な言葉で話しかけられると，じっと最後まで聞く。
6	自分の経験したことを絵や動作などの手がかりを使って担任や母親から話してもらうと喜んで聞こうとする。
7	担任や母親の話を聞く時，よくわからないところがあってもうなずく。
8	友達から身振り，指さし，声，簡単な言葉などを使って働きかけられた 時，内容がよくわからなくても頓着しないことがある。
9	担任や母親から，短めの文をいくつかつなげて話されても最後まで聞く。
10	担任や母親から働きかけられても， 自分なりの思い込みなどがあると正しく受け取れないことがある。例）「今日は早く帰るよ。だから，絵本は読まないよ。」と言われても，帰る前にいつも本を読んでもらっているので絵本を取ろうとする。
11	担任や母親から話しかけられてよくわからない時，「ん？」という顔つきをする。
12	担任が友達に話しかけているのに気付くと，関心を向け聞こうとする。よくわからないとすぐ視線をそらす。
13	形になじんでいる担任や母親の話しかけはわかるが，口形になじんでいない他の人から話しかけられても，わかろうとして聞くことは少ない。
14	学級内の母親など慣れた人の話しかけであれば，内容がわからない時，首をかしげたり，「ワカラナイ」「ナニ？」などと言ったりする。
15	友達の話がよくわからない時，「ん？」という顔つきをするがわかった部分だけに応じてすませてしまう。
16	自分の経験したことについて話してもらうのを喜び，うなずいたり，思いついたことを言ったりしながら楽しそうに聞く。
17	担任が友達と話しているところに割り込み「ナアニ？」「ドウシタノ？」などと尋ねる。
18	日常生活の簡単な内容なら学級以外の母親達やあまりなじんでいない教師に話しかけられてもわかろうとして聞くことが増える。
19	相手の話す言葉の意味を取り違えて不思議そうな顔をしたり，確認のために自分が受け取った言葉で問い返したりする。
20	担任や学級内の母親達などよくなじんでいる相手に対してであれば，話を聞いている途中で聞き漏らしたりわからなくなったりした時，聞き返す。例）「モウ　1回　言ッテ」「今　ナンテ　言ッタノ？」
21	担任が友達と話しているのに気付くと，自分から近寄って話を聞き内容をつかもうとする。
22	友達同士のやりとりで相手の話がわからない時，首をかしげたり，「ワカラナイ」「ナニ？」などと言う。
23	それほど親しくない大人の話もわかろうとして聞く。わからない時は尋ねてわかろうとする。
24	自分が経験したことを担任や母親が他の人に話している時，そばで聞いていて，自分の経験と照らして違うところを指摘したり，思ったことを言ったりする。
25	担任や学級内の母親達などよくなじんでいる相手であれば，話の中にわからない言葉や事柄があると，その意味を知ろうとし，自分なりの言い方で尋ねる。例）「～ッテ 何？」「～ッテ 何ノコト？」「～ッテ ドウスルコト？」
26	相手の話がよくわからない時，絵や文字を書くように頼んだり音韻サインをつけるように頼んだりして，よりわかろうとする。
27	担任や母親の昔体験した話や空想的な作り話など，自分の経験したことがない長い話をわかろうとして聞く。
28	友達の話に相づちを打ちながら聞く。
29	参親者など初対面の人の話もわかろうとして聞く。わからない時は尋ねてわかろうとする。
30	相手の話を区切りまで聞き，自分なりに理解したことを伝え，相手の言おうとしたことと合っているか確かめる。合っていないとわかると，思いこみを修正して聞く。
31	なじんだ人が話し相手であれば，聞きもらしたりわからなかったりしたところだけを抜き出して尋ねることがある。例）「エッ？　イツヤルッテ　言ッタ？」
32	相手の話の中に聞き慣れない言葉があった時，わざわざ聞き返さないで前後の文脈から類推してわかろうとすることがある。
33	知りたいこと，疑問に思うことがはっきりし納得できるまで質問の仕方をいろいろかえて尋ね，わかろうとする。

それぞれの項目に対して、「Ａ：そう思う。（当てはまる）」、「Ｂ：どちらかというとそう思う。」「Ｃ：どちらかというとそう思わない。」、「Ｄ：そう思わない。（当てはまらない）」のいずれかに〇をつける。

表 9-5　言語発達の検査項目と検査内容の例

項目	検査内容
数の記憶（注１）	教示された数を復唱する。
ことばの復唱（単語）	教示された単語を復唱する。
ことばの復唱（文）	教示された文を復唱する。（３～５文節文） （例文） ・えきの　かいだんを　のぼる。 ・みどりの　ぼうしが　かわに　おちた。 ・でんしゃの　まどから　たかい　やまが　みえた。
ことばの理解（注１）	子どもは、教師が言った言葉を聞いて、４枚の中から適した絵を選ぶ。
聞いて理解	子どもは、教師が読む文を聞いて、内容に合った絵を選ぶ。 （例文） こうたろう君は、お母さんと一緒に買い物に行きました。お肉は買わないで、じゃがいもとたまねぎを買いました。それからリンゴジュースを買いました。 
読んで理解	子どもは、自分で文カードを読み４枚の中から適した絵を選ぶ。 （例文） おかあさんと　こうえんに　いった。 ふたりで　アイスを　たべた。 ぼくの　アイスのほうが　おおきかった。 
お話づくり	子どもは、提示された絵を見ながら自由に叙述する。  １枚の絵（注２） ４枚続きの絵（注３）

・（注１）言語学習能力診断検査（ITPA）を使用
・（注２）こぐま会「ひとりでとっくん13　おはなしづくり１」の絵を使用
・（注３）幻冬舎×こぐま会「おはなしづくり絵カード」の絵を使用
・その他の項目は、作成

３.指導の充実を目指した授業実践

1)「授業を振り返る視点」の作成

人工内耳装用幼児の言語指導において、大事にしていること、大事にすべきと考えていることについて幼稚部教員全員で書き出し、「授業を振り返る視点」として整理した。整理する上では分類しにくい内容のものもあったが、便宜上次の項目に分けて整理し、この項目を基に、授業研究会時に使用する記録票を作成した（図 9-2)。

紙面の都合上、本稿では「授業を振り返る視点」の具体的な内容は割愛する。

＜「授業を振り返る視点」の項目＞

「補聴や音に関すること」、「傾聴態度に関すること」、「教師の話し方に関すること」、「理解の確認に関すること」、「分からせる、考えさせる働きかけに関すること」、「教師の言葉かけに関すること」、「口声模倣に関すること」、「視覚的教材に関すること」、「子ども同士のやりとりに関すること」、「その他」

視　点	記　　録
補聴や音に関すること	
傾聴態度に関すること	
教師の話し方に関すること	
理解の確認に関すること	
分からせる、考えさせる働きかけに関すること	
教師の言葉かけに関すること	
口声模倣に関すること	

図 9-2　授業研究会記録票の一部

2）指導の充実を目指した授業研究

①対象学級

人工内耳装用幼児が在籍する５学級を対象とした。内訳は以下の通りである。

３歳児：２学級　　４歳児：２学級　　５歳児：１学級

②授業研究の進め方

日々の実践において、上記の授業を振り返る視点について配慮した指導を行った。授業研究は以下の手続きで行った。

（ｱ）グループ毎の授業研究（グループは各学年の教師で構成する）

ⅰ授業場面の録画　・学級で言語活動を行っている場面をビデオ録画する。

ⅱ授業研究会　・録画したビデオの内、10 分程度を抽出し視聴する。

・「授業を振り返る視点」に基づいて意見交換する。

ⅲ整理　・意見交換した内容を記録票に整理する。

・記録票を基に、今後工夫改善する点について確認し合う。

ⅳ授業改善　・確認し合った内容をそれぞれ指導に生かす。

（ｲ）全体での情報共有

幼稚部全体でグループ毎の授業研究の内容を報告し、「授業を振り返る視点」に沿って大切になることを確認する。

③授業研究会で話し合われた内容

授業研究会では、録画場面で実際に見られた具体的な指導や指導の手立て、その意図、関連して普段気を付けていることなどを話し合い、記録票（図 9-2）に整理した。今年度グループ毎の授業研究会は 6 回行ったが、その記録の中から、傾聴態度、教師の話し方、補聴機器や音に関すること、の３視点について一部抜粋して紹介する。

（ｱ）傾聴態度に関すること

・子どもの言いたいことをよく教師がよく聞いており、子どもは「ちゃんと聞いてもらった」と満足した表情だった。このような経験の積み重ねが傾聴態度作りに繋がると考えている。

・「見ないと事態が動かない」ように、常に留意している。

・見て返事をする、見て聞くことを徹底している。

・聴覚を使ってなんとなく聞いている様子の子がいるが、きちんと見ることを誘ってから話し始めている。

・子どもの発信をタイミング良く受け止めて返事をしており、子どもは満足していた。こういうことも傾聴態度を育てることに関係していくだろう。

・教師が話している途中で子どもが話し始めたときに、「見て」「聞いて」などの直接的な言葉をかけるのではなく、教師は話を止め、もう一度始めから話し直すということを行った。すると、子どもが「あれ？おかしいな」と気づき、話すのをやめ、教師の話を聞く姿勢になった。今回はこのような手立てをとったが、状況によっては、「今は聞くときだよ」と具体的に話の聞き方を伝えることもある。

・やってみたい、見てみたいという活動だったので、子ども達はよく教師を見て話を聞いていた。

（ｲ）教師の話し方に関すること

・教師が声を張ると子どもも声を張り、教師の話し方が柔らかいと子どもの話し方も柔らかくなっていた。子どもはよく聴覚を使っていた。場面に応じた声の大きさや話し方を教師は意識して行っていくことが大切である。

・早口になってしまう子どもに対して、教師はあえてゆっくり話しかけていた。それを聞い

て子どもが話す速さを換え、ゆっくり話し始めていた。子どもとの信頼関係が築けていて、子どもが聴覚を活用しているために、教師が指示や指摘をしなくともこのような子どもの姿が見られたのだと思う。

・3歳児の間に、短いやりとりの中で、きちんと見て聞くことを習慣づけたいと考えている。そのため、話す文の長さには十分気をつけている。

・子どもが聞き取りやすい話すスピード、文の長さが配慮されていた。

（ｳ）補聴器や音に関すること

・雨が降ってきたときに、よく音を聞かせ、それを言語化していた。

・CDを使った毎日繰り返す歌遊びでは、音源に耳を傾けられるよう、教師はあえて歌わず、指でリズムを取り、口形を見せるだけにしている。

・手遊びや歌遊びでは、友達同士が合わせてできるように、友達の声や動きに意識を向けさせるようにしている。

・授業中、放送が入ったときはよく聞かせるようにし、話の内容や誰の声か等についてやりとりするようにしている。

・本学級では、集団補聴システムは、子ども同士のやりとりを重視する場面ではあえて使わないようにしている。

４.人工内耳装用幼児の一人一人の子どもへの指導の充実を目指した事例検討

1）対象

人工内耳装用幼児が在籍している５学級からそれぞれ１名を事例対象とした。

2）事例検討の流れ

各担任は、幼児の課題についてテーマを設定し、幼児の実態と日頃の取り組みをまとめ事例検検討会で話題提供する。参加者全員でつまずきの背景や今後の指導について意見交換する。意見交換した内容を取り入れながら実践し、その結果を報告する。

3）事例検討会の手続き

①話題提供

人工内耳装用幼児が在籍する学級担任が話題を提供する。日頃の指導を行う上での、コミュニケーションや言葉の育ちに関する課題等について簡潔に説明する。

②質疑応答

幼児の実態と課題について質疑応答を行う。

③小グループによる話し合い

教員が2～3人のグループに分かれ、つまずきの背景や指導について具体的に話し合う。

④発表と質疑応答

グループで話し合った内容について発表し、意見交換を行う。

4）事例検討会のテーマ

事例検討会のテーマを表9-6に示す。

表 9-6　事例検討会のテーマ

	事例検討会のテーマ
第１回	聴覚的な反応はよいのだが、口声模倣において、音の欠落、音の入れ替わりが多い子どもへの指導（５歳児）
第２回	言葉の理解や習得に時間がかかる子どもへの指導（４歳児）
第３回	発音に課題のある子どもへの指導（４歳児）
第４回	話者や教師に気持ちを向けてやりとりする幼児を育てるための指導（３歳児）
第５回	２月末実施予定

5）事例検討会の実際

第１回の事例検討会の記録から抜粋して次に記載する。

①テーマ「聴覚的な反応はよいのだが、口声模倣において、音の欠落、音の入れ替わりが多い子どもへの指導」

②対象幼児：５歳児学級在籍男児

人工内耳両耳装用　　装用閾値　左右ともに 30dB～35dB

③テーマに関連した幼児の実態と課題

・話者を注視する際、視線がそれることが多い。

・口声模倣を誘った際、助詞の欠落が多い。

・「は」と「か」、「し」と「ち」と「き」、「す」と「つ」と「く」の音で聞き間違えていることが多い。

④幼児の実態と課題に関する質疑（抜粋）

・本児の言い間違いは、聞こえたとおりに言っているために生じているのか？

→担任としては、そう捉えている。この課題については、耳鼻科の ST にも相談したが、ST も同意見であった。

・口声模倣をする際、最後まで注視している時と、そうでない時では違いがあるか？

→視線が動いてしまうことが多い子どもだが、最後まで注視していれば正しく口声模倣できることが多い。

⑤小グループで話し合った内容の発表（抜粋）

・言い間違える語の記録を取り、把握する。

・話者を最後まで見る習慣を付ける。

・最後までつかみきれる文の長さや単語の長さを意識して口声模倣を誘う。

⑥話題提供者より

・無声子音が続くときに言い間違いが多いことが確認できた。その点に留意して本児の聞き取りの様子を見たり、口声模倣を誘ったりしていきたい。

・人工内耳を装用していて、聴覚的な反応が良い子どもでも、話者を最後まで見る姿勢を育

てることは大切なことである。基本に立ち返って指導に取り組みたい。
・本児が「気をつけて言えた」と実感できるよう、文の長さや単語の長さに留意して口声模倣を誘っていきたい。

Ⅴ 今後の課題

次年度の実践研究では、幼児の実態把握と集積した授業研究や事例検討の記録を基に人工内耳装用幼児の「聴覚を活用した言語指導」における配慮事項等を明らかにしたい。